緒方洪庵生誕200年前夜
－病弱な洪庵が偉大な業績をあげた原動力－

特別寄稿

柳　田　　昭*

Eve of two-hundredth anniversary of Koan Ogata's birth

－ The magic power of sickly born Koan drove him into do these great achievements. －

はじめに、

生れつき病弱で小学入学の時には自分の知らない間に、一年間の就学猶予が両親によって申請されていた小生にとって、従来の洪庵の伝記に対する最大の不満は、「洪庵は生来病弱だった」と「洪庵は偉大な業績を成し遂げた」というそれぞれの内容が平然と記述され、その二つを結び付ける記述が全く欠如していることにあります。

実は「生来病弱だった」という健康面でのハンディをどのように克服して、「偉大な業績を成し遂げたか」という点に、洪庵の真骨頂があるのではないでしょうか。

そこで僭越ながら小生はその原動力について敢えて推論を試み、識者の皆さんに批判を仰ごうと思います。

Ⅰ、洪庵は幼児から気管支炎か肺炎にしばしば罹り、晩年は胸部疾患の中で医学的に感染性が否定される肺癌を患っていた

彼本人は一七歳で中天游の塾に入った時、父の机の上に残した置手紙で、「章固柔弱…」と、生来体が弱かったと述べ、さらに嘉永二年（1849）、四〇歳の時に出版した『病学通論』の自序に「…多病不能勉強…」と、病気がちであり勉強が出来なかったと記しています。

*Akira YANAGIDA
1938年1月生
京都大学法学部（1969年卒業）
現在、著述業（歴史小説）
TEL：06-6724-3250
FAX：06-6724-3250

さらにその後、彼が四四歳の時の日記「癸丑（嘉永六年、1853）年中日次之記」によると、除痘館の仕事と患者の往診に多忙を極めたこの年の元日から九月一七日までの九カ月半の間に、「不快引き篭り」「不快につき、回勤休む」など体調不良による休診日が合計二三日に及んでいます。

このことから洪庵は晩年、肺結核だったと推論する説がありますが、当時、肺結核は労咳と呼ばれ、その感染性から当人を世間や家族から隔離して除け者状態にするのが常でしたし、ましてや病人を癒すことを使命とする洪庵が、他者に感染する虞れのある病を抱えて診療を続けたとは到底考えられません。

実際、彼が中年以降に恵まれた子供たちは誰一人として感染もせず、立派に成人しているところから、肺結核説は否定されるのではないのではないでしょうか。

最後に唯一人洪庵の死を看取った八重夫人が、彼の死後八月五日付で名塩の妹に送った手紙によると、

「昨秋より一方ならぬお勤め、今までは我がままにお暮らしなられ候御身が御殿向きの事、また医学の御用向き、何につけてもご心配の多く、世上は騒がしく、子供は大勢なり。ご心配事ただの一日も安心と思い召さずに、ご病気もかねて胸の痛みもなく、……にわかに咳が出て、その時少々血が出て、また咳が出て候えば、この時はもはや口と鼻の両方に、一時に血がとんと出て、そのまま口をふさぎ、縁側のところにでて、血を吐かれ候ところ、追々出て、もはや吐く息は少しも相成らず候と相見え、…こと切れ申し候…」と記されており、

「かねての胸の痛みもなく」ということから、胃や食道など消化器系の疾患による吐血説は否定され、彼の持病は胸部疾患であり、死因は肺からの喀血による窒息死であり、咳・血痰・胸痛などを来す肺に発生する癌腫、即ち、肺癌だった可能性が大であり、

八重夫人の手紙にあるように、江戸での生活環境の激変による心身疲労により、爆発的に症状悪化して死に至らしめたものと推量するほかないのです。

Ⅱ、その洪庵が成し遂げた業績は、「医師として、学者として、教育者として」鼎立した偉大なものだったのです

1、医師としては

イ、町医者として「大坂医師番付」最高位の勧進元に上げられる。

ロ、嘉永二年（1849）、牛痘苗が初渡来すると同時にジェンナー式種痘にいち早く取り組み、迷信・悪評との苦節一〇年を経て、江戸に先んじて大坂除痘館の官許を得る。

ハ、我が国における第二次コレラ騒動に対処して、『虎狼痢治準』百部を出版して必要地域の医師に無料配布する等など

2、蘭学者としては

イ、江戸の宇田川榛斎から依頼された病理学総論『病学通論』（三巻）を出版

ロ、ドイツのベルリン大学教授フーフェランドの五〇年にわたる自己の経験を集大成した内科学『扶氏経験遺訓』（全三〇巻）を出版

ハ、医師の倫理を説いた「扶氏医戒之略」を著す等など

3、教育者としては

イ、適塾は瓦町（天保九年～弘化二年）、過書町（弘化二年末～文久二年七月）で、大坂での活動は二五年間、適塾に学んだ塾生たちは墓碑銘に記される「教えを請うた者その数三千に及び」、その人々が全国的に活躍を繰り広げたのです

ロ、輩出した逸材の数々（なお数字は適塾姓名録番号）

大村益次郎（52、山口、塾頭、蕃書調所教授、長州・維新政府軍事指導者）、

武田斐三郎（117、愛媛、蕃書調所教授、五稜郭設計）、

佐野常民（132、佐賀、博愛社設立、日赤初代社長）、

橋本左内（183、福井、藩主松平春嶽の懐刀、安政の大獄に連座し死刑）、

大鳥圭介（221、兵庫、幕府陸軍奉行、戊辰戦争で官軍に抵抗、政府外交官）、

長与専斎（301、長崎、塾頭、長崎・東京の各医学校校長、コレラ予防法）、

福沢諭吉（328、大分、塾頭、慶応義塾）、

花房義質（557、岡山、政府外交官、日赤社長）、

高松凌雲（580、一橋慶喜侍医、パリ万博、五稜郭で赤十字精神を発揮）等など、これらの人々は政治的立場や目指した道は多種多様だが、いずれも「人のため、道のため、国のため」という洪庵の志しを受け継ぎ、「洪庵の分身」であろうと努めたのです。

4、そして何よりも「医師として、蘭学者として、教育者として」鼎立するいずれの分野でも卓越した業績を残した例は歴史的に希有な存在だったのです。

Ⅲ、洪庵にとって最初の師は父惟因だった

1、洪庵の生家である佐伯家の祖先は代々荘園の首領だった

寿永二年（1183）の頃、九州豊後で勢力のあった豪族、緒方惟栄が洪庵の遠祖であり（現在、大分駅から西方約50 kmの所に緒方町がある）、その数代後の惟康は大友氏に仕えて佐伯荘に荘園をもち、その地名から佐伯氏と称するようになり、その後、大友氏が没落し、その結果、佐伯氏も一族離散して、惟康の末弟の惟寛だけが足守に住み着くことになりますが、それが足守の佐伯家の直接の先祖にあたるのです。そして惟寛の子の弘直だけが田上という姓を名乗りますが、これが洪庵の幼名の姓の由来であり、彼が後に中天游の蘭学塾に入門する時から名乗ったのが遠祖の緒方、そして実家の姓が佐伯といずれも祖先に由来するものなのです。

つまり洪庵の祖先は代々荘園の首領だったのであり、その地域で生きる民百姓の暮らしを外敵から守る言わば護民官だったのです。

2、父佐伯惟因が仕えた足守藩は幕府から外様藩への見せしめとして苛めを受け続けた

足守藩とは、備中岡山の賀陽郡と上房郡内に二万五千石を領有した外様小藩ですが、慶長六年（1601）、豊臣秀吉の正室ねねの実兄で姫路藩主だった木下家定が転封されて新しく生まれた藩なのです。

当時、家定は独り京都にあって亡き秀吉を追悼する妹ねねを保護していて、関ヶ原の合戦（1600）には参戦しなかったので、天下の実権を握った徳川方から咎めを受ける理由はなかったのですが、徳川方にとって毛利藩を防長二国に封じ込めるための中国地方の戦力配置から、豊臣前政権とかかわりの深い家定を姫路藩から転封することは必要不可欠な処置だったのです。

そのために家定は後の一国一城制の先例として、石高は減封されないとは言うものの、白鷺城と呼ばれる天下の名城、姫路城の城主から城を持たない大名に格下げされたのです。

そしてその後も徳川家による永遠の支配を目論む幕府は、外様各藩が抱く「天下はまわりもち」という思想へのみせしめとして、足守藩に過酷な仕打ちを次々と仕掛けることになるのです。

最初の仕打ちは慶長一三年（1608）、家定の死による家督相続に際して、長男勝俊と次男利房がいましたが、叔母ねねの独断による裁定で、長男勝俊が単独相続し、二代目藩主の座に就きますが、ねねのこの独断による相続が家康の逆鱗にふれ、足守藩は廃藩にされ、勝俊は京都に隠棲して歌人木下長嘯子として生涯を終えます。

そしてその後の慶長一九年（1614）、大坂冬の陣で、次男の木下利房が徳川方に味方して戦功を立て、元和元年（1615）、幕府はやむなく恩賞として足守藩の再興を認めますが、次のみせしめとして再興後の二代目の藩主利当の頃の江戸城普請手伝いを皮切りに幕府助役を次から次と命じて、それが足守藩財政の慢性的窮迫の原因になります。

洪庵の父惟因が足守藩に出仕したのは再興後の六代目にあたる利忠の時で、その後、五代にわたる藩主に仕えたのですから、おそらく元服まもなく出仕して七四歳で隠居するまで勘定方一筋に勤めあげたのです。

ところが、父惟因が仕えて三人目の第七代藩主利徴の時、長年の開拓によりやっと五千石増やして内高を三千石にし、藩財政が改善しかけた矢先の寛聖一一年（1799）、幕府は足守藩に対して残酷極まりない仕打ち、足守藩にはるか遠く離れた東北の陸奥国伊達郡・信夫郡との村替えを命じたのです。それも内高の七割以上にあたる二万二千石もです。

これは明らかに素直に村替えに従えば良し、そうでなく少しでも口答えすれば廃藩を辞さないという二者択一を迫る挑発的な仕打ちであり、足守藩はあわてて奥州郡奉行を置いて対処しましたが、この移封により収納高七千石を減じて「半減の収納」となります。

その結果、藩は洪庵が誕生する文化七年（1810）前後には破綻状態になり、文化五年（1808）には藩財政不如意につき、倹約のため、「部屋住みの藩士をすべて親掛りとする」、即ち、まだ独立していない藩士は藩に仕えさせながら俸録は与えず、親が扶養するものとしたのです。

その二年後の洪庵が誕生した年には、もうこの頃になると、足守藩の財政が破綻状態にあること、その原因が寛政十一年に幕府から押し付けられた残酷な村替えにあるところから、幕府は足守藩の廃藩を目論んでいるようだという噂が、江戸や大坂の金貸しの間に広がり、そのため、どこも藩名義では借財を引き受けてくれず、藩は苦肉の策として、仮に廃藩になっても、土地に縛り付けられて逃散することも許されない領内の百姓衆に目を付け、借り主を領内三ヵ村の百姓連名とし、彼らの年貢米を担保に、藩のために借財させたのです。

その結果、やっと藩が手にした「銀十貫目」とは、文化七年の銀相場では、金一両が六四、四匁ですから百六十両ほどにしかならず、足守藩の財政が当時どんなに窮迫していたか、手に取るように分かるのです。

その後、ようやく藩財政が一息つけるようになったのは、村替えから三二年も経った天保二年（1831）、もうこの時は洪庵は既に大坂での蘭学修行を終え、江戸での修業の真っ最中でしたが、幕府から陸奥領分の内、丁度半分に当る一万一千余石を領内の賀陽郡に戻されてからだったのです。

3、足守藩での父惟因の頑張りの秘訣は利他主義だった

洪庵の父惟因は足守藩への出仕以来、勘定方として勤めますが、最初の頃から困難に直面する度に、荘園の統率者として人々の暮らしを守

り護民官としての役割を果たしてきた祖先を頭に描き、こんな事で挫けてはだめだと自分自身を叱咤激励して頑張ってきたのです。

しかし、寛政一一年（1779）の幕府による村替えは、惟因に立ち直れないほどの打撃を与えました。

その惟因を絶望の渕から立ち直らせたのは、百姓衆がいつもと何の変わりもなく、朝は朝星、夜は夜星で、せっせと鍬を使って立ち働く姿でした。

惟因は考えに考えて、決意します。

「自分は藩の勘定方としてたいしたことも出来ていないのに、祖先のように人々の護民官としてなどと、自惚れていただけではなかったか。そして現実の困難に直面すると、もう何もかも投げ出して逃げ出したくなっている。百姓衆は土地に縛り付けられて逃散することも許されていない。しかし、彼らは考えてもどうにもならないことをくよくよ悩んだりしないで、せっせと鍬を使って土地を耕し、やがて実る次の収穫のために黙々と精をだしている。そうだ、先祖のようにと、出来もしない憧れを抱くことと人生の目的を利他主義に置くことは似ているようでまったく違う。

自分も人生の目的を他者のために尽くす利他主義において生き抜くことだけを考えよう」

それからは、いくら考えてもどうにもならないことをくよくよと悩むことがなくなり、自らの勤めに一層精を出すようになりました。

勿論、藩の財政状況が良くなったわけではありません。それどころか、文化五年の「部屋住み藩士の親掛り」とか、文化七年の「領内百姓連名による藩のための借財」とか、藩として面子丸つぶれのやり繰りを必要とするほど、藩財政は破滅の危機に瀕していたのです。

4、洪庵が生まれて最初に教えを受けた師は父惟因だった

そんな時、洪庵が誕生します。

父惟因は、人生五十年と言われた当時、もうその時期も目前に迫った四四歳で子宝を授かったのです。可愛くないはずがありません。一日の勤めが終わり、陣屋から帰宅して幼子を抱き締めるだけで、一日の疲れが癒される気がしたはずです。

しかし、その子は生まれ出た時から産声も弱々しく、幼没することなく生きていけるかどうかさえ危ぶまれるほど病弱だったのです。

親として何をしてやったら、この子が生き抜いていけるか、父惟因は真剣に考えました。そして行き着いたのが、自分自身も生き返らせてくれた利他主義の教えだったのです。

たしかに利己主義だろうが、利他主義だろうが、人の寿命を変えることはできません。しかし、自分自身の利害のみを行為の目的として、他者のことは念頭に置かない利己主義では、自分の健康のことが目的そのものになり、考えても体が強くなるわけではないのに、くよくよ考え込んでしまい、その揚げ句、病弱さを口実に物事に消極的になったりすることは避けられません。

しかも元和年間の初めから二百年の長きにわたって我が国全土から戦が消え平和が続く昨今、この子が成長して藩に出仕するにしても、藩士としての役割は武力よりも、統治能力や行政能力が必要とされるのであり、体の弱さは決定的な障害にはならないのです。

だから父惟因は生まれつき病弱な幼な子に生きる力を与えるために利他主義を叩きこもうとしたはずです。

勿論、利他主義をどういう形で教え、どの程度仕込んだか、何も書き残されていないので分かりません。

しかし、足守藩において寛政四年（1792）に創設された藩士の子弟の教育を目的とする藩校の追琢舎は、洪庵が学齢期に達した文政年間（1818～1829）、即ち、洪庵が九歳から二〇歳までの期間、学校自体が衰退して閉鎖されており、洪庵自ら、後の自著『病学通論』の自序に、「章成童従家君、於大阪之邸、学文習武、多病不能勉強…」、即ち、自分が少年の頃、父に従って同行した大阪の蔵屋敷で、学問を学び武術を習っていたが、病気がちで十分勉強が出来なかった」と記しているところから、洪庵の最初の師が父惟因だったのは間違いないのです。

Ⅳ、洪庵は父の教え利他主義を活用して、病弱さという弱点を医者としての利点に変えた

彼は中天游の元に入門する際、父の机に残した置き手紙に、「…雖不肖欲学於医也。夫医道者、治疾病之術、而扶持於万民之法也…」、即ち、自分は不束者ですが、医学を学ぶことを望んでいます。医術は病気を治し、多くの人々を助ける方法だと述べ、父惟因から教えを受けた利他主義を自分に見事に生かし、さらに続けて、『章固柔弱、而非千為武之質、是故欲志医已三歳也」、即ち、自分は生まれつき柔弱で、武士としては相応しくないので、すでに三年前から医への志を決めていたと述べているのです。

この置き手紙から父惟因が洪庵が生まれた頃、藩財政のあまりの困窮さから、生き方としての利他主義を確立し、洪庵も幼いながら真剣に学び、その内容を把握していき、一四歳の頃、利他主義を自分自身のものにして、普通に考えると否定的要因である「自らの病弱さ」を、「病弱な自分だからこそ患者の苦痛を自分のこととして感じることができる」と積極的要因に転換することによって、医の道を学び、医者になって、父から教えられた利他主義を貫徹する決意をしたのです。

Ⅴ、洪庵の利他主義は彼の全ての業績の原動力だった

父から授かった利他主義は驚くほどの効果を発揮します。

まず洪庵自身ですが、頑張り過ぎると疲れが溜まり体調を崩すのは相変わらずでしたが、少しぐらいなら根を詰めても、また病床に伏すことになるのではないかと、くよくよ考えて寝付きが悪くなるようなことがなくなり、熟睡できて、翌朝また活力が戻ってくるようになったのです。

次に、当時、蘭学を志す青年の目的は西欧の最新の学問を身につけて、国元の藩の藩医に、出来れば有力な藩や幕府に仕官の口をという立身出世主義がほとんどでしたから、「自分は病弱で病人の苦痛を自分の事のように感じられるから町医者に」という洪庵は、大坂でも江戸でも師や先輩や同僚から歓迎されます。

大坂では、師の中天游から「大坂町人蘭学の盛衰」の教訓から、「是非ともやり遂げねばならぬこと、決してしてはいけないこと」の一部始終を教えられ、その上、大坂蘭学の将来を託され、師匠の奥さんで臨床医として有名なさださんからは、鞄持ちとして往診に同行する内に臨床医学の実際を叩き込まれます。

当時、塾頭だった大庭雪斎破、後に瓦町適塾に客分格として入塾して『扶氏経験遺訓』の参校者を引き受け、佐賀に帰郷後は国元から多くの塾生を送り込んでくれたから、佐賀県は「適塾姓名録」の記名者数が全国で三番目に多いのです。

江戸でも同様で、師の坪井信道は自分の師だった宇田川榛斎に紹介され、その榛斎から舎密学と薬学を教えられ、榛斎の死の直前には未完の病理学の翻訳を託されます。

塾頭で長州出身の青木周弼は帰郷後国元から多くの塾生を送り込んでくれたので、長州は「姓名録」の記名が第一位なのです。

洪庵の当初の目的は町医者になって病人たちの苦痛を救うことだけでした。ところが次には、蘭学を志す若者たちを育てて未来を担う人材を世に送り出すことを使命として加え、その上さらに、最新の理論書を翻訳して出版することで、広く医に従事する人々の力量を高めることまで、彼は使命として加えていったのです。

「医師として、教育者として、蘭学者として」、この三つの使命を鼎立して遂行することは、体の強い者でもできることではありません。実際、この内の二つの分野で成果をあげた人は、幾人もありますが、鼎立して業績を残した人は皆無だったのです。

それを生涯病弱だった洪庵が成し遂げたのです。その原動力こそ彼の利他主義による無私の精神だったのです。

彼は大坂蔵屋敷の留守居役だった父惟因と大坂での師中天游から、大坂町人社会の伝統についてしばしば話を聞かされました。

それは裏長屋で暮らす人々がよく言い交わす「同じ鍋釜の物、分け合った仲やないか」という下町の人情を底流として、物作りでは住友泉屋が銅精練の技法、南蛮吹きを大坂銅吹き屋すべての「相伝」としたことや、学問の世界では儒学者である懐徳堂の中井履軒が『越俎弄筆』を著して、天文学者麻田剛立の業績を世に紹介したことなど、助け合いの精神こそ、大事を成すための要諦だということだったのです。

自分の病弱さを承知している洪庵は自分一人ではどんな些細なことでも中途半端に終らざるを得ないことを危惧していました。けれども、これで策は成ったのです。

利他主義を全面に掲げて、大坂町人社会の伝統である助け合いを呼びかければ、事はなるのです。三人寄れば文殊の知恵とか、三人寄れば師匠の出来とか言うではありませんか。

彼は率直に手助けを師匠にも先輩や同僚にも呼びかけました。彼の無私の精神はこうした人々すべてが本来持つ連帯の精神を揺り動かしたのでしょう。

洪庵はこうして広範なネットワークを作り上げ、それまで誰もあげたことのない偉大な業績を残したのです。

参考引用文献

「緒方洪庵伝」　緒方富雄著　岩波書店
「緒方洪庵と適塾」　梅溪　昇著　大阪大学出版会
「適塾をめぐる人々」　伴　忠康著　創元社
「適塾の謎」　芝　哲夫著　大阪大学出版会
「藩史大事典」第六巻　中国四国編　足守藩史
雄山閣出版
「最新　医学大辞典」　医歯薬出版